平成２９年３月２５日発行　第10号

魚沼市 まちづくり委員会だより

今私たちにできること

会長　桑　原　郁　夫

いつもまちづくり委員会に対しご協力いただきありがとうございます。28年度より会長を務めさせていただいております桑原郁夫と申します。宜しくお願いいたします。

私たちができる事については、考えているだけで行動を起こさないことが多くあるように感じています。市民会議では、川村先生が市外で使うお金の１％を市内で使えば市内のお金の循環も良くなり、それに伴う相乗効果は大きなものがある。という話をされました。

いろいろな地産地消を取り入れ、魚沼市が更に活性化できるよう皆で取り組んでまいりましょう。

魚沼市まちづくり市民会議

●平成２８年１２月１１日

地域づくりに大切なことは日々の暮らしにわくわく感を持ち続けることが大切。
高齢者や若い人達が一緒になった魚沼市の将来を語り合うことが大切。

魚沼市コミ協協議会長を務めている。
自助・共助・公助がスムーズに機能できるよう市民の立場で頑張って行きたいと日夜考えている。

まちづくり委員会
アドバイザー
広島経済大学教授
川村健一氏

熱弁を奮う３名のパネラーと川村先生

雪山で稲藁を燃やし無病息災を祈る「百八灯」を盛上げる中学生。お祭りでお神輿の担ぎ手が少なくなって困っている千葉の中学校。
お互いの行事に参加することから交流できる縁を取り持ちたい。

魚沼市に移住したくて、竜光で地域おこし協力隊員として働いている。逆に地域住民から熱い支援を受けて魚沼に来てよかった。
魚沼の特産物を市場に売り出すべく商品を検討している。

地域産業振興部会

平成28年度　地域産業振興部会活動結果

H29年まちづくり委員会共通テーマ　**「人口減少問題対策」**

地域産業振興部会の立場で、人口減少の深層を究明し、どんな対策が有効か部会で話し合って来ました。

1．調査の結果

① 人口減少は東京圏以外、全国的な現象であることは周知の事実。魚沼市の場合は、新潟県平均値をはるかに超えるワースト３。

② 魚沼市の人口減少は平成17年～平成26年の10年間で5,575人。他の市に移り住んだ人が2,870人多く、人口の７％に該当する。

2．考えられる主原因

① 高等学校・専門学校・大学卒業後、将来勤め続けられる企業が少ないため、就職で魚沼市に戻って来る人が少ない。

② 転出の15～20歳の50％、30～44歳の46％が職業や住宅事情の転出理由。

3．転出を積極的に止める策

子育て支援中心の対策だけでは転出増加が止まらない。
積極的に就業人口を増やす作戦が最大の効果で急務。

【地域産業振興部会で検討している項目】

① **“魚沼の四季物語り”**で誘客　“人が暮らす世界一の豪雪地”を世界に発信
冬の**白銀の世界**　豪雪から目覚めた**山菜と森林浴の春**
夏は自然に囲まれた避暑地**尾瀬国立公園・奥只見湖**
秋は雪化粧前の**豪華絢爛錦の深山**でキノコ狩り

② 里山魚沼市に米作農業と酪農を中心とした**循環型産業を興す**
農業大学等の研究機関を魚沼市に誘致　農業立市を極める

③ 四季の食材を使った市民総出演の例えば**“うおぬまＰｉｚｚａ”開発**
市民力＝使命感＋達成感＋充実感＝**活性化した魚沼市創造**

④ 関越自動車道小出ＩＣを**うおぬま・尾瀬沼口ＩＣ**へ変更
堀之内ＩＣを**うおぬま北ＩＣ**へ変更しイメージＵＰ

⑤ 東京圏から２時間の天然資源の宝庫うおぬまに、寿歳の別天地**「天寿の里プラチナタウン」**など建設

⑥ 丹精込めて作りこんだ**魚沼ブランド推奨品や郷土料理の発信基地**を「道の駅深雪の里」に併設

興味のある
皆さんのお力を
お貸しください！

まちづくり委員会

会　　長　桑原　郁夫
副　会　長　米山　幸子
生活自然環境部会長　森山　右文
福祉健康部会長　石井　健友
地域産業振興部長　清水　義次
教育文化部会長　高野　俊治

■部会開催日程■　※どなたでも参加できます。

生活自然環境部会
定例会
第２月曜
広神コミュニティーセンター

地域産業振興部会
定例会
第３水曜
福祉センター

福祉健康部会
定例会
第４水曜
小出公民館

教育文化部会
定例会
第４月曜
小出公民館

☆隔月で合同会議も開催しています。

福祉健康部会

魚沼市の地域医療について講演会　平成28年12月19日

病院の世紀から地域包括ケアの時代へ
住民こそ医療資源　病院を学校にする

地域はひとつの大きな病院

より多くの学生が医療に関心を持てるよう
若い医師を地域医療の懇談会に送りたい

小出高校の医療専攻科について

魚沼地域は、里帰り出産が多い。
小出病院と基幹病院の連携はうまくいっている。安心してください。

魚沼市は、地域医療魚沼学校の出張型ナイトスクールや、楽語い講座[※注1]（らくごいこうざ）など医療関係者による地域住民に対する積極的な地域医療活動が行われており、魚沼市の地域医療は先行しています。

また、小出病院祭りは、ふだん病院に行かない住民が病院を訪れる良い機会になっています。

まちづくり委員会福祉健康部会は、地域医療魚沼学校長　布施克也先生に「魚沼地域医療の現状や課題と今後の具体的な取り組み内容」について講義を依頼しました。

当日は、布施院長と鈴木副院長の講義と参加者による活発な質疑応答がなされました。今後は楽語い講座に住民オープン講座を増やすとのことで、福祉健康部会員も、積極的に参加します。一般市民の積極的参加を呼びかけます。

注1：楽語い講座：楽市楽座のようにいろんな職種の人が集まって語り合う地域医療講座で月２回小出病院２階講堂で開催。随時市報に掲載。

教育文化部会

今年度の活動を振り返って

魚沼市まちづくり委員会の活動計画のテーマ「魚沼市の人口減少対策」。

当部会もそれに沿った活動となるわけですが、教育文化部会の活動計画はまさにそのテーマが直結するとの認識で一致し、活動がスタートしました。それは寺子屋事業、子育て支援、祭り文化継承の３つです。

部会の回数は合同部会と抱き合わせなどで単独開催は６回でした。参加者が毎回５人から９人とやや寂しい感がありましたが、それぞれモチベーションをこなしながらの参加者で、活発な意見を交わすことができました。これからはどの部会でも新部員を増やすことが課題となりそうです。

実施事業の柱は、夏休み・書初め・小出小青空子ども会まつり・小出小鮭の稚魚放流など今年で４回目を迎えた寺子屋事業でした。いずれも佐梨コミ協、ＰＪ「結」、魚沼漁協、学校支援地域本部との協働で行えたことはまさに「まちづくり」でした。これからの活動が市内全域に広がっていくことを期待したいです。

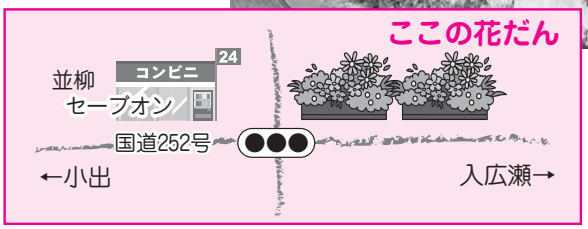
また、総会のグループワークで学んだボトムアップ組織をめざすひとつとして、会議記録の順番制や情報の共有発信などステップアップも図りました。更なる前進をめざして活動していきたいと思います。

生活自然環境部会

第３回魚沼花じまんコンテスト

第３回魚沼花じまんコンテスト
金賞に輝いた『並柳区』区長　加藤達雄さんにインタビュー！

『並柳区』は、
並柳子供会、
並柳育成会 代表関矢孝夫さんの
50名ほどで活動している皆様です。



―金賞おめでとうございます。授賞の感想をお聞かせください。

加藤さん：とてもうれしいです。今回初めて花コンに参加したのですが、みんなが一生懸命頑張って花だん作りをしているので、もっと早く花コンに参加すれば良かったです。

―花だん作りはどのように始めたのですか？

加藤さん：数年前からしているのですが、昨年まではばらで、今イチきれいにならないので、今回は講習会を開き植え方を習い、配色なども考えて植えました。

―花苗はどこで仕入れますか？

加藤さん：市の花いっぱい運動の苗と自分達で買います。今年は昨年の倍くらい買いました。

―階段状の花だんで広いので、植込・管理は大変だと思いますが、どのようにしているのですか？

加藤さん：上の段は大人が植えて下の段は子供達に植えてもらいます。草とりは子供達にしてもらい、水やりや枯れた花つみは、区の役員等でしています。花だんの土が少ないので、雨がないと朝晩の水やりがたいへんです。

―うれしいことは？

加藤さん：道を通る方にキレイとほめられたり、頑張っていると励ましてもうらうことです。次回はまた講習会で子供達に植え方を習ってもらい、さらにきれいに植えたいです。

あざかやな色のマリーゴールドが道行く人の目を楽しませてくれました。
ご参加、ご協力たいへんありがとうございました。

授賞者のみなさま

銀賞　守門中学校・佐藤春代
銅賞　佐梨地区コミュニティ協議会
　　須原コミュニティ協議会
　　郡山由紀子・鈴木富子（敬称略）

参加者のみなさま

湯之谷芋川集落・小平尾クラブ・小出小学校青空みまもり隊・入広瀬公民館園芸教室・伊米ヶ崎公民館・和田老人クラブ・四番町三町内会・上条コミュニティ協議会・小出小学校・佐梨保育園・コミュニティ協議会権現堂荒川時子・大平由紀夫・桑原美佐子・佐藤　光・重野二一・尾澤新吾佐藤久美・近　貴行・酒井礼子・中村秀夫・斉藤嘉雄　（敬称略）

編集後記

ふと思った、最近１週間ひと月が早く感じられる。子どもの時はもっと１日が長かったような気がする。授業を受けている時間は長く、沈む夕日さえゆっくりで夕暮れをずっと見ていた記憶がある。今は１年前の事さえ、つい昨日の事のように感じられる。１日24時間同じはずなのに、記憶に加速でもかかっていくのだろうか。不思議に感じる。

こんな風に、人によって受ける感覚や思いは違う。時間だけでなく、いろいろなことについても言えるのではないか。あくまでも感じたり思ったりすることなので、何が正解で何が間違っているとはいえない。皆、様々な背景や意見を持ち、様々な生活をしている。

「地域づくり」もそうかなと思う。年代・立場などそれぞれ違っても互いに認め合い、何かしら発展的な方向に進んでいければいいのではないかと考える。

平成29年3月25日　第10号　■発行：魚沼市まちづくり委員会　■編集：まちづくり委員会だより編集委員
■連絡先：魚沼市まちづくり室（魚沼市役所）Tel 025-792-9752　E-mail:chiiki@city.uonuma.niigata.jp
■まちづくり委員会ホームページ：http://www.machidukuri-uonuma.com